今、金）氏と結んで一帯を支配したことに遡る、という経緯がまるでドラマを見るように描かれています。細部がどこまで典拠に基づくかは解りませんが、ローマ建国のことなどを考えますとあり得ることです。司馬遼太郎自身が日本にもあって欲しかったロマンを歴史解釈に投影していると言う部分も多分にあるかも知れません。当然男だけで行きますが、子孫がいますから、現地の女人を自分たちのものにして、支配を広げていったことになります。

日本では例外的な遠征、拡大、支配は、歴史上たびたび繰り返されました。二〇〇七年の春まで堺屋太一が日本経済新聞に連載していた『ジンギスカン』にも、同様の残虐行為が部族間の闘争に繰り返し登場します。近代になっても、イタリアのアペニン山中の村で、飢饉の折、ある年齢層の未成年男子を全員追い出し、生き延びようとしたという記録を読んだことがあります。おそらく昔からの風習で、ちょうど黒澤明の映画を通じて我々が想像するような日本の中世の農村とか、そうした厳しい状況下でしょうか。それがあろうことか、近くの村を襲った為に大問題になって、歴史に留められることとなったようです。これはインド・ヨーロッパ語族、あるいはそもそも遊牧部族の遺風で、彼らにとっては正当な経済行為の一部だったようです。紀元前二〇〇〇年紀の後半にエジプトを始め地中海東部に猛威を振るい、忽然と姿を消した野蛮な「海の民」も、その暴力性からいってインド・ヨーロッパ語族以外には考えられない、というのが私の先生ホフマン教授の常々語るところでした。

「海の民」(sea people, Seevölker)

歴史上「海の民」と呼ばれる人々が、紀元前十三世紀から十一世紀にかけて小アジア沿岸からエジプトに亘って破壊的来襲を行ったことが主としてエジプトの史料から知られています。バルカンの奥から起こった、あるいはそれが連鎖反応を引き起こした民族大移動で、複数の部族・民族が絡んでいるらしく、ミュケーナイ諸都市に壊滅的被害をもたらし、ヒッタイト王国滅亡の原因を作り、さらに小アジア、シリア、パレスティナ、エジプトを攻め、エーゲ海に暗黒時代を引き起こしたとされています。地中海の覇権をめぐるトロイア戦争に続く時代であることに注意が必要です。図6はエジプトでの攻防の情景を描いたメディネット・ハブ神殿のレリーフ(前十二世紀前半)です。彼らは同時に傭兵や捕虜としてエジプト側にも参戦していますので注意がいりますが、一種パターン化された「海の民」の装束が解ります。一つは戦車を用いた戦さ、一つは舟による海戦のシーンです。ヘルメットに二つのタイプがあり、角を生やしたもの(エジプト側で参戦していると見られる者のそれには中央にさらに円盤か球のようなものがついている)と一見モヒカン刈りのような「冠毛型」のヘルメットです。来襲側の舟の舳が水鳥の格好をしているのは気に留めておいて良いと思います。野戦の方には、両軍に同じような馬に牽かれた二輪の軽戦車が見られます。牛四頭に牽かれた二輪の荷車は来襲した側に属し、中に複数の婦人が乗り、子供らしき者も見られます。武器は

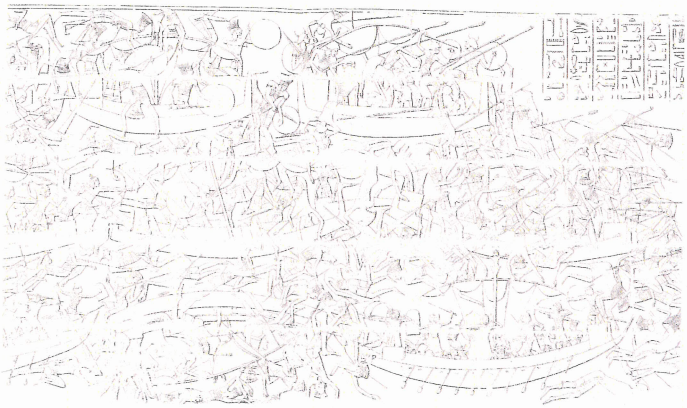


Abb. 3. Die Seeschlacht in den Reliefs von Medinet Habu

Abb. 4. Die Landschlacht in den Reliefs von Medinet Habu

図６　海の民(ラムセスⅢ世[前12世紀前半]のメディネット・ハブ神殿の浮き彫り)

槍と長短様々な剣です。海戦ではエジプト軍の弓矢が相当に効果を発揮していますが、これを射る者はエジプトの装束をしており、中に傭兵は含まれていないようです。「海の民」、エジプトまで襲って破壊だけ残して歴史から姿を消した人々、これは何者なのか。それはインド・ヨーロッパ語族の基になったと考えられる人々の拡大よりもかなり後の時代のことですが、最終的には一連の印欧語族の移動・拡大の波に連なるものであると言えると思います。特にその攻撃性、破壊性は苛烈です。しかし決してテロリズムとして破壊を重ねている訳ではなく、彼らなりの正当な活動、敢えて言えば経済活動の一つと捉えられるものと思われます。

インド最古の讃歌集『リグヴェーダ』からも攻撃的な活動の存在が知られます。牛が不足するとよその部族から調達します。「牛探し」（ガヴィシュティ *gáviṣṭi-*）と言います。つまり、相手が従わなければ襲い奪います。この役割を担う武闘派の若い衆がおり、ヴィーラ（*vīrá-*, ラテン語の *uir*「男」と同源）とよばれます。今日でもそのような事態のあることが伊谷純一郎『トゥルカナの自然誌』に報告されています。トゥルカナはアフリカのタンガニーカ湖の東側に生活する部族です。彼らも実際には羊と山羊が暮らしに重要であるにもかかわらず、牛によって生きていると思っています。財産は牛です。牛を増やし、足りなくなるとよその部族から牛を調達に行きます。今日ですから銃を持っていますが、伊谷純一郎はそれに同行しています。

トカラ語派（Tocharian）

トカラ語は二〇世紀に解読された言語で、中央アジアのクチャ（亀茲：西トカラ語、トカラ語B）とアグニ（焉耆、別名カラシャール：東トカラ語、トカラ語A）を主要拠点に、六～八世紀を中心に資料が残されています。サンスクリットから逐語訳された仏典が主です。全く孤立した環境にこの時代まで印欧語の一つが生きていたことに注意しておく必要があります。この時代の中央アジアの資料は中期イラン語（ソグド語、コータンサカ語、トゥムシュクサカ語）、シナ語（中国語）、ティベット語、ウイグル語（古トルコ語）の文献研究と研究環境を共有しています。少し時代が遡ると、他の中期イラン語であるバクトリア語、コワレズミー語が加わります。

ギリシャ語派（Greek）

ギリシャ語派については既に触れましたが、考古学的知見との関連で心に留めておいてよいことがあります。線文字Bで書かれたミュケーナイ文書は紀元前一二〇〇年には確実に遡り、クノッソスのものは紀元前一四〇〇年に遡る可能性があるとのことです。ヴェントリス（Michael Ventris）が一九五三年に解読に成功し、ギリシャ語であることが解りました。しかし、シンクレア・フッド（Sinclair Hood）というイギリスの考古学者による『ギリシャ以前のエーゲ世界』という概説書が一九六七年に出版され、日本でその翻訳がよく読まれているようですが（村田数之亮訳、創元社、

世界古代史叢書2、一九七〇)、彼は「この解読に賛成または反対する理由は根本的には言語学的であって、いささか難解である」と述べた後、「ここで私が提出しようとする青銅器時代末の主な出来事の概観とは、線文字Bの言語はギリシャ語ではないこと、しかしそれはエーゲ世界でギリシャに先行したある言語(本土起源であるか、あるいはよりありそうなクレタ起源であるかのいずれか)であること、そしてまたギリシャ語を語る最初の定住者は、前十三世紀末にペロポネソスにその地の諸宮殿の破壊者としてきたこと、これらの仮定にもとづいているのである」と述べています(一二七頁)。つまり、もしミュケーナイ文書が解読されておらず、純粋に考古学的知見から判断するならば、ギリシャ語を話す諸部族のエーゲ海への進出は一段階遅い時代に想定せざるをえないということです。考古学的証拠からある文化の担い手を確定することの危うさを示す典型的な例です。先に触れた「海の民」のなかにはアカイア人に当たると思われる部族名(ヒッタイト文書には紀元前十四世紀半ば以降現れる)が含まれますし、ミュケーナイの諸都市を始めとする青銅器文化を破壊し、鉄器をもたらしたこの部族移動の動乱期とギリシャ各部族のエーゲ海への進出とを重ね合わせて考える方が状況証拠としては自然なのでしょう。実際には、それに先だつことおそらく二〇〇年以上前からギリシャ語の一方言を話す人々がペロポネソス半島からクレタ島まで、それまでの文明状態と断絶を示さない形で進出し了えており、破壊の跡を特別残さずに王宮のある都市を作り上げていたことになります。因みに、大災害をもたらしたサントリン島の大爆発は前十六世紀のことの

ようです。

ギリシャ語派には方言形が多く伝わり、その比較から一段古いギリシャ祖語の姿を復元できます。ただし、ミュケーナイ文書の解読にも拘わらず、ホメーロスの英雄叙事詩が印欧語比較言語学にとって第一級の資料であることには些かも変わりありません。小アジアの、戦役後のイリオン（トロヤ）の辺りにはイオニア方言がありましたが、その地を流した吟遊詩人たちはヒオス島（Khios）で訓練されたといわれ、従って基にはアイオリス方言が見られます。イオニア方言がその上に重なり、さらにアテーナイにもたらされてアッティカ方言の加工を受け、今日の形に固まったと言うのが大筋の経緯と思われます。インド側にもこのような世俗要素の強い文献があれば良いのですが、紀元前後の長い期間に亘って編集されたと想定される『マハーバーラタ』まで待たねばなりません。叙事詩、吟遊詩人の成立動機という点でも比べられる所があります。ギリシャ側にはこうしたジャンルの文献が紀元前一〇〇〇年紀の前半に既にありました。

ヴェネト語（Venetic）

ヨーロッパの印欧語には、短い碑文や古典文献中の引用、語彙集などから知られる「痕跡言語」が複数知られています。イリュリア語（Illyrian）、フリュギア語（Phrygian）、トラキア語（Thracian）、マケドニア語（Macedonian）、レポント語（Lepontic）、メッサピア語（Messapic）、スイクリ語

(Siculian)、などなどです。その中、ヴェネト語(Venetic)については確認しておくべきことがあります。ヴェネト語を話す人々はケルト族に続いて中部ヨーロッパの各地にいたようです。今のロマンチック街道、ヴュルツブルクからフュッセンにかけての地名に「虜になったヴェネト」、「ヴェネト人の本拠地」などという名前が並びますが、この地名に残るヴェネト人の実体はスラヴ人だと言われています。つまり、ヴェネト人は中部ヨーロッパにいましたが、その西側に南下していたゲルマン人と後から東側に進出したスラヴ人との間に板挟みになり、南に活路を求めて移動し、北イタリアに遺跡を多数残したようです。ゲルマンの部族はその後隣接するようになったスラヴ人を、スラヴはゲルマンを、もと隣にいた「ヴェネト」の名で呼んだと考えられます。ヴェネトは最終的にはヴェネツィア(「ヴェネ

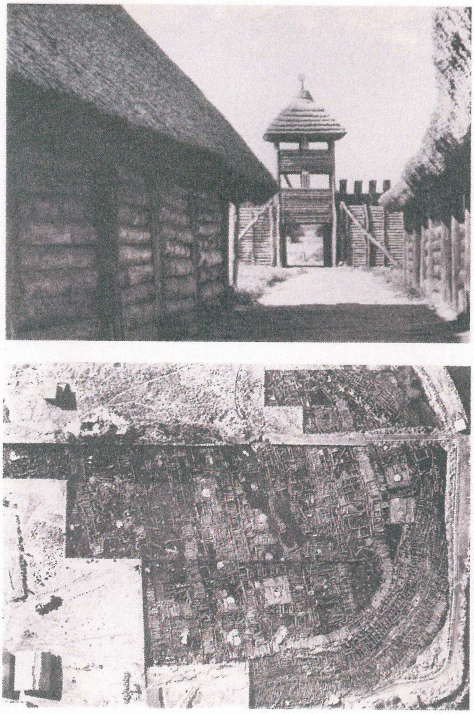


図7　ビスクピン

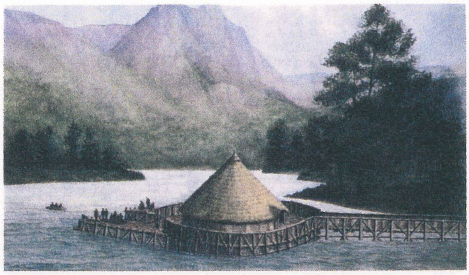


図８　英国の島とアイルランドにある
ケルト人の集落の再建

ト人たちの土地」）の名の基になっています。いつ頃海中に防御都市が作られたのか、ヴェネト人との関連は、という問題についてはさらなる解明が必要です。

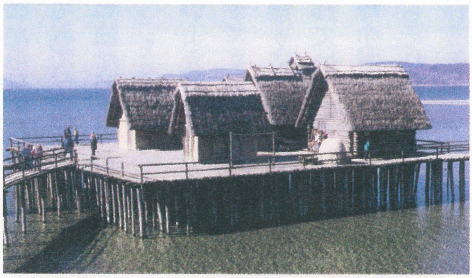
水上の防御集落

海中の防御集落ということでポーランドのビスクピンに脱線することをお許し下さい。ポーランドのビスクピン（Biskupin）は歴史の方では割と有名な遺跡のようです。一般に、ケルトのハルシュタット（オーストリア）文化と並べて、紀元前六〇〇～四五〇の年代が推定されているようです。泥炭地の湿地帯に丸太を並べて、その中に村が作ってある大規模な遺構が発掘されました。橋一本だけで外部に通じるようになっており、水城のような防御施設中に暮らしが行われていました。吉野ケ里を思わせる見晴らし台が再建されています。ヴェネツィアも海に杭を垂直に打ち込んでその上に町を建設したわけです。

図8に掲げたのは、Birkhan, *Kelten*（Wien 1999）より採録した英国の島とアイルランドにあるケルト人集落の再建です。こうした水の中に作られた防御集落は各地に見られるようです。図9は南ドイツのボーデン湖に近いFedersee の水城です。防御しなければならない理由は何だったのか。後に触れるギムブタスに倣って言うと、最終的にはインド・ヨーロッパ語族の拡散に帰することになるでしょう。

イタリック語派（Italic）

ローマは一日にしてならなかったわけですが、もともと、ローマとナポリの間、ローマの南八〇キロ程の所にラティウムという漁村があり、そこの方言がラテン語のもとになっています。ラティウムの人たちは、フォロ・ロマーノのあるあの高台を拠点にして、ちょうど南部の若者による八戸や三戸と同じように、ローマ市を席巻したわけで



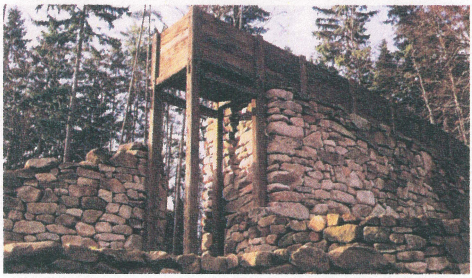


図9　（上）南ドイツの水城（紀元前1100年頃）
（下）北フランケン（バイエルン州）の城塞
（紀元前1300／1200から800頃）

す。ローマを自分たちのものにして、そこから発展して遂に全ヨーロッパを支配しました。喩えて言えば、和歌山の白浜あたりの若者が出てきて、比叡山か天王寺辺りを占拠し、京都あるいは大阪全体を支配し、やがて日本全体が和歌山弁になった、というところでしょうか。そういうことが実際に起きました。

伝説に過ぎないと解説されることが多いようですが、絵画やオペラなどに取り上げられるテーマに「サビーニの女たちの略奪」があります。ローマを建国したばかりのロムルス率いる男たちが、女が足りないのでサビーニ族をだまして祭りに招き、若い女性たちを略奪するという話です。この話の背景にはそうとう重要な史実が隠されているように思えます。

このラテン語がイタリック語派の代表です。ただし、イタリック語派の祖語は完全には復元できないところがあります。方言差が最初からそれだけかなりあります。昔はオスコ・ウンブリア語とよばれましたサベル語群、ラテン語を含むラティノ・ファリスキー語群などに分類されます。当地にはエトルスク人たちもいましたが、エトルスク語は未だに説得力ある解読には至っていないようです。アナトリア語派、従って印欧語だと言う説もありますが、印欧語ではない孤立言語とする見方が昔から有力です。地中海の覇権に関わった民族の一つであることは確かで、先ほど触れました「海の民」に含まれる一連の部族と関連する可能性も指摘されています。本来イタリアにいた民族とする説もあるようです。